

人間科学部入試方法の検討 (1)

—大学の成績を中心とした基礎研究—

本田 時雄・大熊 保彦
勅使河原 勝男・森井 利夫

An Investigation on Methods of Entrance Examination (1)

—Basic Study as to Mainly with University Records —

Tokio Honda · Yasuhiko Ohkuma
Katsuo Teshigahara · Toshio Morii

The remarkable results were as follows.

On the average : The marks of the students admitted on recommendation rose year by year, but those admitted on examination did not always rise. In 1981, the former was better than the latter for variables (general educations, foreign languages, physical educations and majors etc.).

Factor Analysis : Pearson product moment correlations of each variable with other variables were obtained, yielding 8×8 matrix in 4 groups admitted on recommendation and examination. Then the factor analysis method (The principle axis method) was applied to this matrix.

Two to four factors were extracted and rotated with varimax method.

In some groups admitted on examination, four extracted factors were independent of each other, and labeled as “university”, “high school”, “English in entrance examination” and “Japanese in entrance examination”.

On the other hand, 4 groups on recommendation had not simple factor structures.

On the consciousness acquiring teachers' licence : This part is related the consciousness acquiring teachers' licence.

This consciousness is correlative with the student's results during high school, their entrance examination, the course and the studies.

University records and extracurricular activities in highschool : Five comparisons were made about university records between two groups distinguished by criteria concerned with extracurricular activities in highschool.

Significant differences were found in some comparisons.

Especially, compared those who had been staffs in their classes in highschool age with those who had not been, the former made significantly better marks than the latter in the subjects of general educations, foreign languages and majors.

I 本研究調査の意図

大学にとって入学者を選抜する入学試験は、年間を通しての一大行事である。

われわれの文教大学人間科学部は、学部開設2年目にあたる1977年度より、大学が男女共学にきりかわったことも加わって、志願者が激増し、定員150名に対して、推薦、学力合わせて志願者が2,000名をこす状況となり、入学試験に学部をあげて従来以上の真剣なとりくみを要求されるようになった。

さらに、1979年から、国立大学共通一次試験が実施されるに及んで、大学受験生全体の間に変化が生じた。すなわち共通一次試験は、5教科7科目といわれるように、受験科目の範囲が広く、私立大学の、いわゆる3教科型と両立しにくいいため、私立大学のみをめざす受験生が増加し、国公立ばなれが進行した結果、一人で何校もかけもち受験する者が従来にもまして一層多くなった。

このことは、本学部入学試験にも影響を与えずにはおかない。受験生の多様化、学力試験における浪人率の増加などの傾向が顕著になったといえるであろう。

こうした経過をふまえて、学部教授会では入学試験のあり方をめぐって、しばしば論議されるようになった。そこでの意見の中には、人間科学部という極めてユニークな学部にあふさわしい学生像を、どのように求めるかという、学部の特性や主体性から出発した意見もあった。一般的に学部のちがいをこえて要求される大学での学習能力に加えて、人間科学部に適性な人材を、どのようにしたら発見しうるかという視点である。しかし、人間科学部にふさわしい学生像といっても、具体的なコンセンサスをうるのはなかなか困難である。また、これをいくら議論してみても、たとえば学力選抜の場合、コンマ以下の僅少の点差で合否が決まり、合格しても入学を辞退するケースが、比較的成績上位の者に多くみられる現実からも、学力選抜そのものに改良を加

えることは常に困難がつきまとう。志願者を絞る(減少させる)方法として、入試科目をふやす、(たとえば全員に数学を課す)などの意見も出るが、それにふみ切るほどの説得力はない。一方、あなたがち経営的発想からばかりでなく、志願者が多いことをのぞむ気持ちも否定できない。

そのような論議を重ねるうちに、1981年度のある学部教授会でとりあげられたのが、推薦選抜のあり方についてであった。すなわち推薦選抜のあり方を工夫改善することによって、何とかよりのぞましい入学者の決定に近づけないかという発想である。

推薦入学の利点としてあげられるのは、①志願者が、その大学、学部を第一志望としているため、高い学習意欲が期待できる。②受験勉強の弊害が少なく、充実した高校生活を過すことができる。③高校の側に推薦基準を示し、それに適合した志願者に限定して選抜することができる。などの諸点である。

しかし、一方では、調査書に表示される成績段階は全国的に一定のレベルでなく、高校間格差があるのは事実であるし、推薦状の内容も形式に流れやすい、などの問題がある。

ある教授会の議論の中で、以下のような趣旨の発言があった。「1年生のクラスで“ヨコ文字をみると頭が痛くなる”といった学生がいたが、かれは推薦入学であった。推薦入学には語学などの能力が低い者もまぎれこむ盲点があるのではないか。」

このような発言を発展させると、推薦入学に学力試験を導入する主張となり、推薦入学制度そのものの否定につながる。しかし、このような推薦入学者に対する消極的評価が、もし事実とすれば、推薦入学のウエイトを重くしようとする動きには当然ブレーキがかかる。現在まで慣行的に全入学者の約3分の1を推薦選抜によって決定してきたが、その適否についても検討しなければならない。

そこで、教授会としては、果して推薦入学者の学力は、学力試験による入学者より低いのか、正確なデータをもとに判断しようとい

うことになり、1982年度よりプロジェクト・チームを設けて追跡調査をおこなうことを決定したのが、この調査研究の発端である。すなわち、推薦、学力という選抜方法のちがいと、入学後の学業成績との間に有意の相関が存在するかをみようとしたのである。そして、その結果で推薦入学者の数や、推薦選抜の方法に改善の糸口が得られることを期待したのである。

プロジェクト・チームが発足してからも、さまざまな議論があった。果して大学の学業成績は標準化するのか、学業成績以外のファクターをどのように評価するかなど、多くの問題に悩まされ、暗中模索しながら検討をつづけてきた。

入学試験改革という命題が、われわれの学部一つをとっても、いかに云うは易く行うは難いかという現実、いくたびか挫折感を覚えながら、まず、その第一段階としてのデータをとりまとめたのが、今回の報告である。

入試の問題をめぐって、当初発足したのであるが、より広く人間科学部の学生像を捉えようという意図の下に、とりあえず次の報告をしたい。まず、大学入試と大学生活の状況、次いで、教員免許の取得希望をめぐる問題、第3に、高校時の課外活動と大学の成績との関連、最後に、今後の研究のための若干の覚え書きである。(森井利夫)

Ⅱ 方 法

調査対象：

文教大学人間科学部昭和54年度入学生から昭和56年度入学生までで、内容は表Ⅱ-1に示すとおりである。

人間科学部は昭和51年度入学生が第1期生であるが、調査対象を上記のように限ったのは、(1)比較的最近の学生であること、(2)調査資料が整備されており入手が困難でないこと、の2点からである。

なお昭和56年度生は現在の4年生であり、

表Ⅱ-1 調 査 対 象

	男	女	計
54年度	103	82	185
55年度	67	75	142
56年度	80	69	149
	250	226	476

成績は3年次までのものである。

調査項目：

調査項目は、付表に示すとおりである。

※印のついた項目は今回分析の対象とした項目、*印のついた項目は今回情報を入手できなかった項目、無印は、今回分析の対象としなかった項目である。

なお、以下の分析において、大学時の成績は、次の計算によって代表値を決定している。

まず、成績は、一般教育、語学、体育、専門の4領域に分けて算出された。各々の成績は科目ごとに0-100点で与えられているので、領域ごとの取得科目数による平均点とした。その際、放棄、受験無資格による無評価は除いたが、不合格による再履習の場合には、不合格得点と再履習時の得点の平均点をもって、その科目の得点とした。

Ⅲ 推薦入学者と学力入学者の高校、入試および大学の成績に関する分析

平均値の分析

1. 方法

分析の対象者：分析の対象者は、昭和54年から56年までの3ケ年の入学者で、表Ⅲ-1のようであった。

表Ⅲ-1 分析の対象者

	推薦入学者	学力入学者	計
54年入学	64	122	186
55年入学	53	90	143
56年入学	54	94	148

分析の対象となった変数は次のとおりであった。

分析の変数: 大学での教科目を、①一般教育、②語学、③体育および④専門の4領域に分け、それぞれの試験の評点(100点満点)の平均値(分母は単位数でなくて科目数)。推薦入学の⑥論文(50点満点)、学力入試の⑦国語および⑧英語、高校での⑨国語の平均点の10倍、⑩英語の平均点の10倍および⑤全教科の平均点の10倍(内申点)。

2. 結果および考察

推薦入学者全体と学力入学全体を比較すると、高校での国語や英語に関して、推薦入学者の方がやや良いという傾向が見られた。また同様な傾向は大学での一般教育、体育および専門科目に関しても認められたが、語学はほぼ等しかった。

両者に関して逐年変化を追ってみると、推薦入学者は、小論文以外の全ての変数が単調増加の傾向を示し(図Ⅲ-1)、Tukey法による差の検定によっても表Ⅲ-2に見られるように大部分の対比較に有意差が認められた。これに対し、学力入学者は明確な傾向が見られず(図Ⅲ-2)、しかも差の検定によっても入試の国語以外、有意に大きい差の認められたものは存在しなかった(表Ⅲ-3)。

次いで推薦入学者と学力入学者との比較を年度毎に見てみよう(表Ⅲ-4)。昭和54年度では学力入学者が語学や専門科目で高得点を得ていたが、55年度からは全ての変数において推薦入学者の方が優れていた。特に高校での国語と英語に関して、3年間一貫して推薦入学者の成績は学力入学者のそれにまさっており、その差が年と共にますます大きくひらいていく傾向が認められた。この傾向は、学力入学者の成績も少しずつ上昇しているが、それ以上に推薦入学者の成績が高くなっているためであろう。

また推薦入学者の語学力が学力入学者のそれよりも劣っているのではないかという指摘が以前からあり、またその理由として入学試験でチェックされていない等が挙げられていたが、本研究によれば、昭和54年度では確か

に推薦入学者は学力入学者よりも劣っていたが、55年度からは逆転していることが明らかになった。

特に56年度では、全ての変数の平均値において推薦入学者は学力入学者よりも優れていたが、ここで成績のバラツキ——標準偏差に注目しなければならない。すなわち学力入学者

表Ⅲ-2 推薦入学者の各変数の年次変化(注1)

変数	S54-S55	S55-S56	S56-S54
一般教育	-2.4	-2.2	4.6*
語学	-5.4**	-0.1	5.5**
体育	0.4	-4.3*	3.9*
専門	-2.4	-2.4	4.8**
小論文	-14.4**	2.2**	12.4**
内申点	-1.0	-2.1*	3.1**
高校{国語	-2.7*	-2.4*	5.1**
英語	-2.8*	-2.8**	5.6**

* P<0.05 ** P<0.01 以下同様

表Ⅲ-3 学力入学者の各変数の年次変化(注1)

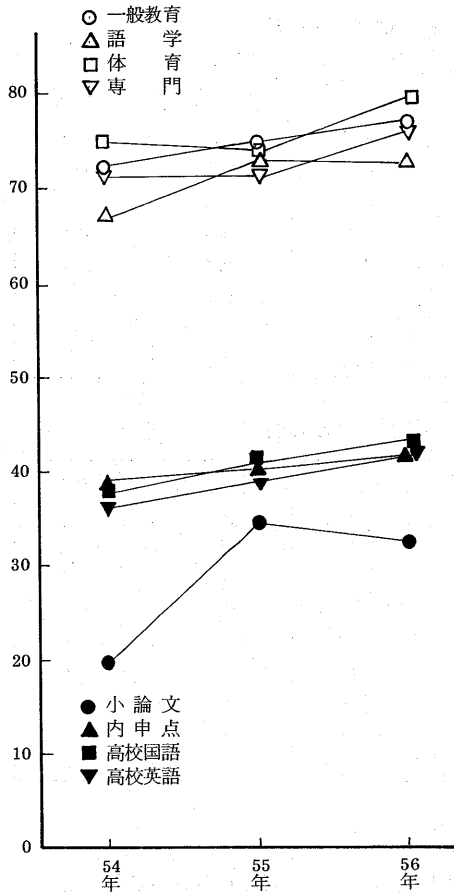
変数	S54-S55	S55-S56	S56-S54
一般教育	1.3	-0.9	-0.4
語学	0.8	0.0	-0.8
体育	1.2	-2.2	1.0
専門	0.9	0.0	-0.9
入試{国語	-3.3**	0.7	2.6*
英語	0.5	-0.8	0.3
高校{国語	-0.8	-0.2	1.0
英語	-1.0	-0.8	1.8

表Ⅲ-4 推薦入学者と学力入学者の差の年次変化(注2)

変数	54年度	55年度	56年度
一般教育	-1.3	2.4	3.7**
語学	-3.7*	2.5	2.6*
体育	0.1	0.9	3.0**
専門	-1.7	1.6	4.0**
高校{国語	2.8**	4.7**	6.9**
英語	2.7**	4.5**	6.5**

注1: 数値は平均値の前記年度との差。検定はTukey法による。

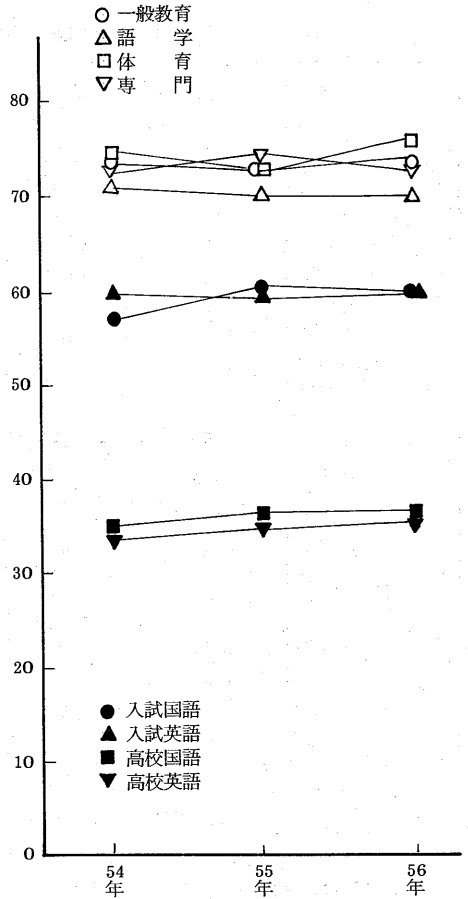
注2: 数値は(推薦入学者の平均値)-(学力入学者の平均値)。検定はt-検定による。



図Ⅲ-1 推薦入学者の平均値

の標準偏差は推薦入学者のそのの2倍近い値であり、推薦入学者の成績がかなり均質であるのに対し、学力入学者は良好のものとそうでないものの差が大きいということである。ここは推薦入学者の方のバラツキの減少によるためである(表Ⅲ-5, 6)。

以上見てきたように、推薦入学者が学力入学者に比して劣っていることはなく、むしろまさっているといえよう。前にも触れたように、推薦入学者はバラツキが小さく、学力入学者はバラツキが大きいので、前者は、後者の優秀な者と比較されると劣っているとみなされるかもしれない。表Ⅲ-3に示されているように、推薦入学者はたしかに学部の創設期には平均値の上でも語学を中心として劣っていた。しかし推薦入学者は年々レベルアッ



図Ⅲ-2 学力入学者の平均値

プする傾向があるが、学力入学者にはその傾向が認められない。その結果が、表Ⅲ-3の56年度の欄に示されている。

因子分析

1. 方法

前述した10または8変数に関して、①推薦入学者と学力入学者をこみにした全データを用いて、②推薦入学者と学力入学者のデータを別個に用いて、さらに③年次毎に、ピアソンの積率相関係数を求めて、因子分析(主軸法による)を行って因子を抽出し、さらにバリマックス回軸を行なった。

以下の結果の解釈において、全般的に相関係数も因子負荷量も大きかったので、因子負荷量が|0.4|以上をとりあげた。

表Ⅲ-5 推薦入学者の平均および標準偏差 (N=171)

変数	昭和54年入学		昭和55年入学		昭和56年入学	
	MEAN	S D	MEAN	S D	MEAN	S D
一般教育	72.9	16.64	75.3	15.28	77.5	4.21
語学	67.4	18.55	72.8	15.49	72.9	8.67
体育	75.5	17.51	75.1	15.72	79.4	6.18
専門	72.0	17.50	74.4	13.05	76.8	5.08
小論文	20.2	5.72	34.8	6.45	32.6	3.06
内申点	39.1	9.20	40.1	6.53	42.2	3.26
高校{国語	38.3	12.22	41.0	7.56	43.4	4.31
高校{英語	36.7	12.16	39.5	8.46	42.3	4.19

表Ⅲ-6 学力入学者の平均および標準偏差 (N=306)

変数	昭和54年入学		昭和55年入学		昭和56年入学	
	MEAN	S D	MEAN	S D	MEAN	S D
一般教育	74.2	12.41	72.9	16.98	73.8	11.88
語学	71.1	13.38	70.3	18.36	70.3	12.98
体育	75.4	13.13	74.2	14.89	76.4	12.70
専門	73.7	12.86	72.8	15.39	72.8	12.20
入試{国語	57.5	12.58	60.8	13.45	60.1	9.18
入試{英語	60.1	13.17	59.6	13.06	60.4	9.47
高校{国語	35.5	8.70	36.3	8.55	36.5	8.34
高校{英語	34.0	9.56	35.0	9.54	35.8	9.36

注：小論文、内申点、高校の国語と英語は50点満点。

入学者全体の分析：

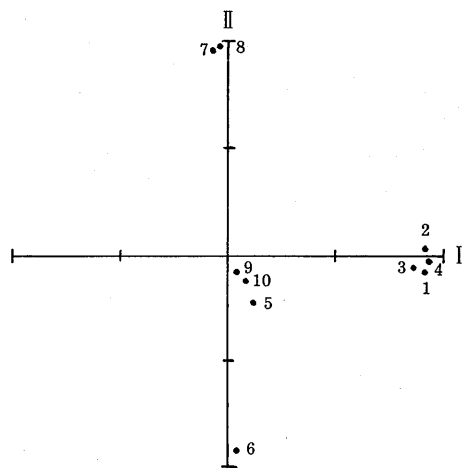
3因子が抽出され、全分散の83.5%が説明された。各変数の因子に対する寄与のバラツキが少なく、各因子が直交しており、単純構造を示していた(図Ⅲ-3a, b, c)。なお共通性は、内申点が他の変数に比してやや小であった。

第1因子は、固有値3.218で、寄与率32.2%であった。専門④、一般教育①、体育③、語学②の因子負荷量がそれぞれ0.924, 0.910, 0.876, 0.858で、他の変数の負荷量は0.2以下であった。したがってこの因子は「大学」因子と命名できよう。

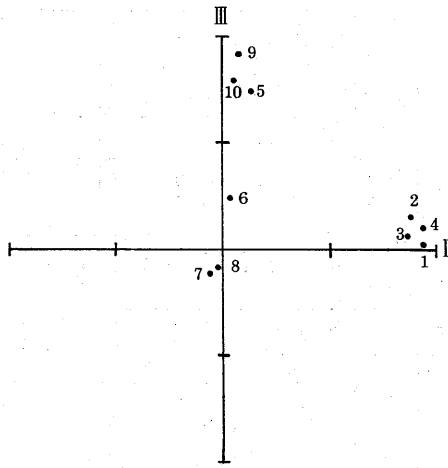
第2因子は、固有値2.841で、全分散の28.4%を説明していた。寄与の大きい変数は入試の英語⑧0.975と国語⑦0.972、小論文⑥-0.933であった。ここで推薦入学の基準である小論文と内申点⑤(-0.212)が学力入試の英語・国語と異符号であったことは注目に値する。

この因子は「入試」因子と命名された。

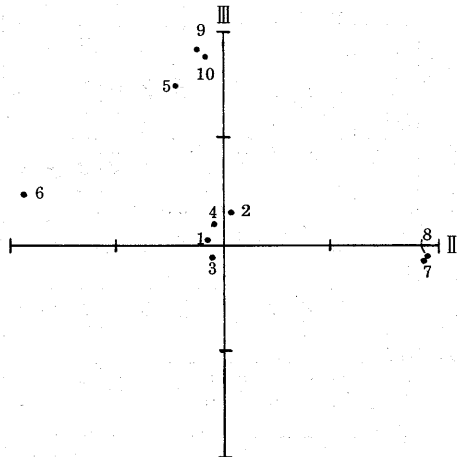
第3因子は、固有値2.294、寄与率22.9%であった。この因子で負荷量の高い変数は高校の国語⑩0.905、英語⑨0.898および内申点0.747で、他はきわめて低かった。「高校」因子と名づけた。



図Ⅲ-3 a 全入学者の因子分析



図Ⅲ-3 b 全入学者の因子分析



図Ⅲ-3 c 全入学者の因子分析

推薦入学者の分析 (表Ⅲ-7 参照)

A. 3年間全体の分析

2因子が抽出され、全分散の83.3%が説明された。この因子分析では、2因子両方に大きな負荷量をもつ変数(内申点, 一般教育, 専門, 体育)があり、単純構造は得られなかった。

第1因子は、固有値3.753, 寄与率46.9%であった。負荷量の高い変数は専門0.869, 語学0.863, 一般教育0.852, 体育0.827, 小論文0.615, 内申点0.547で、大学の教科に関する変数は全て0.8以上であった。この因子は「大学・入試」因子と命名できよう。

第2因子は、固有値が2.906で、全分散の36.3%を占めていた。この因子は、高校の英語0.923, 国語0.885, 内申点0.760であり、少し離れて一般教育0.443, 体育0.440, 専門0.421と続いていた。「高校・内申」因子と命名された。なお小論文の共通性が0.390と他の変数のそれ(0.8以上)に比してきわめて小さかった。

B. 年次毎の分析

(a) 昭和54年度; 全体の分析と同様な傾向が見られ、単純構造は得られなかった。2因子が抽出され、全分散の90.4%が説明された。

第1因子は、「大学・入試」因子で、固有値4.409, 寄与率55.1%であり、高校の国・英以外の全ての変数の負荷量が0.7以上であった。

第2因子は、固有値2.820で、全分散の35.3%を説明していた。高校の英・国が負荷量0.9以上, 内申点が0.603, さらに一般教育, 体育, 専門が0.4台で続いていた。「高校・内申」因子と命名された。なお小論文の共通性は、他の変数のそれらと比較すれば低いが、0.713とやや大きくなった。

(b) 昭和55年度; 3因子が抽出され、全分散の94.7%が説明され、やや単純構造に近くなった。もし取り上げる因子の負荷量の基準を|0.45|とすれば単純構造となった。

第1因子は、固有値3.556で、全分散の44.5%を説明していた。大学の一般教育, 体育, 語学, 専門が負荷量0.8以上であり、他は小さかったので「大学」因子と命名された。

第2因子は、固有値2.814, 寄与率35.2%であった。この因子は、高校の英語, 内申点および国語が負荷量0.9以上であり、さらに専門の負荷量0.415で続いていた。専門は第1因子と重複しており、第1因子の負荷量の方が大であった。この因子は「高校・内申」因子と名づけられた。

第3因子は、固有値1.205, 全分散の15.1%を説明していた。この因子に大きく寄与した変数は小論文0.939で、「小論文」因子と命名された。

表Ⅲ-7 推薦入学者の因子分析

変数	全 体			昭和 54 年度			昭 和 55 年 度				昭 和 56 年 度			
	F1	F2	h ²	F1	F2	h ²	F1	F2	F3	h ²	F1	F2	F3	h ²
一 般 教 育	.852	.443	.923	.856	.478	.962	.911	.316	.211	.975	.733	-.083	-.178	.575
語 学	.863	.341	.862	.837	.369	.837	.889	.372	.164	.956	.875	-.017	-.033	.768
体 育	.827	.421	.861	.863	.444	.941	.911	.285	.182	.945	.233	-.027	-.825	.734
専 門	.869	.440	.948	.880	.427	.956	.826	.415	.332	.965	.836	-.011	-.421	.876
小 論 文	.615	.110	.390	.833	.137	.713	.287	.174	.939	.994	.298	-.620	-.274	.548
内 申 点	.547	.760	.877	.742	.603	.915	.371	.863	.277	.959	-.033	.884	-.303	.875
高校 { 国 語	.325	.885	.889	.335	.912	.944	.352	.859	.173	.891	.129	.650	-.452	.644
高校 { 英 語	.244	.923	.910	.314	.928	.959	.280	.900	.029	.889	-.005	.829	.257	.753
Σ α _i ²	3.753	2.906		4.409	2.820		3.556	2.814	1.205		2.163	2.284	1.327	
寄 与 率	46.9	36.3	(83.2)	55.1	35.2	(90.3)	44.4	35.2	15.1	(94.7)	27.0	28.6	16.6	(72.2)
相 对 寄 与 率	56.3	43.7		61.0	39.0		46.9	37.2	15.9		37.4	39.6	23.0	

表Ⅲ-8 学力入学者の因子分析

変数	全 体					昭和 54 年度			昭 和 55 年 度					昭 和 56 年 度				
	F1	F2	F3	F4	h ²	F1	F2	h ²	F1	F2	F3	F4	h ²	F1	F2	F3	F4	h ²
一 般 教 育	.930	.180	.131	-.125	.929	.862	.426	.924	.941	.093	.180	-.083	.934	.960	.037	.002	-.055	.925
語 学	.913	.208	.056	-.135	.898	.811	.460	.869	.936	.010	.184	-.077	.916	.929	.117	.057	-.033	.881
体 育	.882	.198	.153	-.176	.871	.817	.412	.837	.831	.231	.276	-.229	.873	.930	.037	.016	-.037	.868
専 門	.912	.222	.164	-.149	.930	.840	.467	.925	.863	.199	.271	-.198	.897	.971	.049	-.020	-.050	.949
入 試 { 国 語	.195	.112	.932	-.257	.985	.809	.168	.683	.166	.922	.079	-.287	.967	-.085	-.033	.101	.988	.994
入 試 { 英 語	.275	.142	.289	-.898	.985	.810	.193	.694	.247	.373	.181	-.861	.974	.031	-.028	.989	.101	.990
高校 { 国 語	.288	.881	.221	.036	.909	.355	.862	.869	.332	.251	.863	.031	.920	.086	.933	-.164	.089	.912
高校 { 英 語	.195	.911	-.035	-.222	.918	.252	.899	.871	.213	-.075	.893	-.263	.918	.063	.937	.125	-.134	.915
Σ α _i ²	3.542	1.802	1.072	1.009		4.275	2.397		3.441	1.160	1.798	.998		3.612	1.768	1.035	1.019	
寄 与 率	44.3	22.5	13.4	12.6	(92.8)	53.4	30.0	(83.4)	43.0	14.5	22.5	12.5	(92.5)	45.1	22.1	12.9	12.7	(92.8)
相 对 寄 与 率	47.7	24.2	14.4	13.6		64.0	34.0		46.5	15.7	24.3	13.5		48.6	23.8	13.9	13.7	

(c) 昭和56年度；前年度と同様に3因子が抽出された。全分散の72.2%が説明されたが、単純構造にならず、単純構造とするためには負荷量0.5以上だけをとりあげなければならなかった。

第1因子は、固有値2.163，寄与率27.0%であった。因子負荷量の大きい変数は、語学0.875，専門0.836および一般教育0.733で、体育は0.233と小さかった。したがってこの因子は「大学文系」因子と名づけられた。

第2因子は、3因子中最大の固有値2.284をもち、全分散の28.6%を説明していた。寄与の大きい変数は内申点0.884，高校の英語0.829，国語0.650，さらに小論文-0.620であった。この因子は「高校・入試」因子と命名されよう。

ここで注目されるのは、同一因子において符号の異なる大きな負荷量が見られたことである。これに関しては昭和59年度の推薦入学者の内申点と小論文との相関がマイナスであったことを付記しておくにとどめる。

第3因子は、固有値1.327，寄与率16.6%で、負荷量のほとんどがマイナスであった。すなわち体育-0.825，高校国語-0.425，専門-0.421であった。この因子の命名は困難であるが、一応「体育」因子としておこう。

学力入学者の分析（表Ⅲ-8参照）

A. 3年間全体の分析

4因子が抽出され、全体の分散の92.8%が説明された。きわめて明確な単純構造が得られた。

第1因子は、固有値3.542，全分散の44.3%を説明していた。一般教育0.930，語学0.913，専門0.912および体育0.882で、他はきわめて小であった。推薦入学者の55年の第1因子と酷似しており、「大学」因子と命名した。

第2因子は、固有値が第1因子の約半分の1.802で、寄与率が22.5%であった。負荷量の大きい変数は高校の英語0.911と国語0.811の2変数で、「高校」因子と命名できよう。

第3因子は、固有値1.072で全分散の13.4%を説明していた。入試の国語の負荷量が0.932と大きく、他は0.3以下で、「入試国語」と名づけた。

第4因子は、固有値1.009，寄与率12.6%で、高校の国語以外の負荷量はマイナスであった。負荷量の大きな変数は入試英語-0.898であり、「入試英語」と命名した。

入試での国語と英語が別個のしかも単独の因子を形成しており、しかも次に述べる年次毎の分析でも、55年と56年においても同様の傾向が現われたことは注目に値しよう。

B. 年次毎の分析

(a) 昭和54年度；学力入学者の他の因子分析とは異なっていた。すなわち2因子だけが抽出され、全分散の83.4%が説明されたが、単純構造を示さなかった。単純構造を得るためには、負荷量の基準を0.5としなければならなかった。

第1因子は、固有値4.275，寄与率53.4%で、高校の国・英以外の全ての変数の負荷量は0.8以上であった。一般教育0.862，専門0.840，体育0.817，語学0.811，入試英語0.810および入試国語0.809であった。この因子は「大学・入試」因子と命名されよう。

第2因子は、固有値2.397で、全体の分散の29.9%を説明していた。高校の英語と国語の負荷量が0.8以上で、次いで専門，語学，一般教育および体育が0.4台で続いており、入試の2変数は0.2以下であった。「高校・大学」因子と名づけた。

なお入試の2変数の共通性が0.6台で、他の変数のそれに比してやや小さかった。

(b) 昭和55年度；全体の因子分析と同様に4因子が抽出され、全分散の92.5%が説明されて、単純構造が得られた。

第1因子は、固有値3.441，寄与率43.0%であった。一般教育，語学，専門および体育の負荷量が0.8以上で、他は小さかった。したがって「大学」因子といえよう。

第2因子は、固有値が第1因子の $\frac{1}{3}$ 以下の1.160で、しかも第3因子よりも小さく、

寄与率14.5%であった。この因子に大きく寄与していたのは入試国語0.922だけであった。「入試国語」因子であった。

第3因子は、前述の如く、固有値が第2因子よりも大きく、全分散の22.5%を説明していた。因子負荷量の大きな変数は高校の2変数で、0.8以上であった。この因子は、したがって「高校」因子と命名された。

第4因子は、固有値が0.998ではほぼ1であり、寄与率12.5%で、しかも入試英語が負荷量-0.861なので採用した。「入試英語」因子であった。この因子の負荷量は、高校国語以外全てマイナスであった。

(c) 昭和56年度；この分析は、55年度の分析と酷似した結果が得られた。すなわち同一の4因子の単純構造が得られ、全分散の92.9%が説明された。

第1因子は「大学」因子で、大学の4変数負荷量が0.9以上であり、他は0.1以下であった。固有値3.612、寄与率45.1%であった。

第2因子は、55年度の第3因子「高校」と対応し、固有値1.768で、全分散の22.1%を説明していた。高校の英語と国語が因子負荷量0.937と0.933で、他は0.2以下であった。

第3因子は、固有値1.035、寄与率12.9%で、入試英語だけが高い負荷量0.989であった。「入試英語」因子。

第4因子は、55年度の第2因子「入試国語」と対応したが、マイナスの負荷量が多かった。固有値1.019で、全分散の12.7%を説明していた。

以上の分析によれば、推薦入学者と学力入学者の因子構造は異なっており、学力入学者の場合は大学の科目、高校の国英、入試の国語および入試の英語が互いにほぼ独立で、大学の成績を予測させるものは殆んどなかった。これが大学や高校の成績に反映しない受験勉強の結果にもとづく入学を意味するならば、速やかに対策を立てるべきであろう。一方推薦入学者の場合、大学の成績は高校や小論文の成績と何らかの関連が認められ、現行の推薦選抜の方向が適正であると考えられる。

以上のことは、昭和54年度から56年度までの3年間だけの分析であり、また本学部は51年に設立されて間もなく、入学者の特性傾向も未だ固定しているとも考えられないので、軽々に結論づけることは避けなければならないが、上記結果を検証し、より良い方向に向けての方策を立てることが急務であろう。

(本田時雄)

Ⅳ 教員免許状取得希望者の分析

1. 教員免許状取得希望者の状況

本学人間科学部では、次の教員免許状が取得できる。1. 小学校教員2級免許状(以下、小免)。これは、教育学部で開講する授業の単位を取得することによって取得できる。2. 中学1級・高校2級社会科教員免許状(以下、中・高社免)。人間科学部で課程認定を受けている教員免許状である。3. 養護学校教員免許状(以下、養免)。社免を取得することを前提として、養護関係の授業は、教育学部で受けることになっている。

人間科学部において、教員免許取得希望者ないし教員希望者が、多いのではないかという議論がしばしばなされる。多分それは、本学に教員養成学部があり、そことの併願によって人間科学部へ入学した学生が少なからずいるという推定、就職希望状況などから出てきたものであろうが、他大学の類似する学部との正確な比較資料をもとに述べているものではない。多いか少ないか、この点については他日を期すより仕方のないことであるが、事實は、表Ⅳ-1で示すものである。Ⅱで述べたように、昭和54~56年度入学生、476人を母数としたものである。各年度ごとのバラつきはあるが、トータルで見れば、約7割の学生がいずれかの教員免許状を取得しようとしている。

性別では(表Ⅳ-1)、「教免取得せず」が男性で多く、その分「中高社免」が女性で多い傾向を示している。教員免許取得希望の傾

表Ⅳ-1 教員免許取得希望者

種別		教員取得せず	小 免	中高社免	養 免	合 計
入学年度	54 年	31.4% (58)	27.0% (50)	26.5% (49)	15.1% (28)	100.0% (185)
	55 年	38.0 (54)	26.1 (37)	31.7 (45)	4.2 (6)	100.0 (142)
	56 年	24.2 (36)	20.8 (31)	40.9 (61)	14.1 (21)	100.0 (149)
性別	男	34.4 (86)	24.8 (62)	29.6 (74)	11.2 (28)	100.0 (250)
	女	27.4 (62)	24.8 (56)	35.8 (81)	11.9 (27)	100.0 (226)
合 計		31.1 (148)	24.8 (118)	32.6 (155)	11.5 (55)	100.0 (476)

注1) ()内の整数は例数, 以下同じ。

注2) 性別について, 両側危険率5%有意水準でのカイ自乗検定は, $\chi_0^2 = 3.343 < 7.815 = \chi^2(0.05)$, 以下同様に示す。

向は, 女性にやや多いと読めるが, 記述統計—カイ自乗検定(両側危険率5%有意水準)—上の有意差は認められない。

2. 分析上の問題

データの分析に入るに当たって, 分析上の問題についていくつか留保しなければならない。それは, 分析上の弱点であり, とりもなおさず本論稿Ⅳの限界を示すものであり, それを明らかにしておこうということである。

第1に, これは「教員免許取得希望者」についての分析であり, 決して「教員免許取得者」や「教職就職者」についての分析ではないことである。周知のように「希望者」の中から「辞退者」が出て「取得者」となり, その中の何割かが, 「就職者」となる。そうしたことから, 教員免許状取得を大学生生活の諸状況とからませて考えるには, 「希望者」「取得者」「就職者」についての分析を相互関連的に並行的に分析していく必要がある。しかしここではその様な分析はなされていない。

第2に, この分析で分るのは, 教員免許希望と諸要因との関連性であり, 例えば何が小免取得希望に向わせるのか, あるいは向わせるのかという因果関係的分析も行われていない。

第3に, 教員免許希望の中では, 誰もが等しい希望を持っている訳ではなく, 是非教員になろうという強い希望があり, 他方取れるものなら取っておこうという軽い希望もあるだろう。その強弱によって学生生活への構えが異なることも十分予測される。個人の動機

に逆のぼって見ることは, 分析上の必要な側面である。第2の問題ともからんでくるが, 意識や態度との分析が全くなされていない。

第4に, 以上のことを考えると, 教員免許希望へ向わせるものとして, 個人的動機の問題のみならず, その形成に寄与しているであろう出身階層, 職業などの社会的要因との分析もなされていない。さらに, 教職就職希望の多寡と関連する社会状況の分析もなされていない。

以上のような問題点を持つ分析である。これは, そもそも研究の出発が, 人間科学部の学生像の把握であり, そのためのデータを既存のものに求めたというところにある。と同時にデータの整理も十分に行なわれていないということにもよる。ともあれ, 上述の留保のういで以下述べることとする。

3. 高校の成績との関連

高校での成績をかなり客観的に把握する方法としては, 内申書以外のデータを持ち合わせていない。高校での成績を内申書の成績評価を資料として使う。

3年間の全教科・科目の個々のサンプルの平均値が出されている。これを通常「評定平均値」としているが, これは, 出現期待としては, 0.0から5.0に分布する。勿論これは論理可能性の問題であり, 実際には, 2.5から4.9の間に10ケースのmissing valuesを除く466ケースが分布している。466ケースの「評定平均値」の加重平均は, 3.74である。「評定平均値」3.7を区切りとして, 以上の者を上

表Ⅳ－２ 「評定平均点」との関連

種別		教免取得せず	小 免	中高社免	養 免	合 計
評 定	上 位	52.5%(74)	64.1%(75)	61.7%(95)	79.6%(43)	61.6%(287)
	下 位	47.5 (67)	35.9 (42)	38.3 (59)	20.4 (11)	38.4 (179)
合 計		100.0 (141)	100.0 (117)	100.0 (154)	100.0 (54)	100.0 (466)

$\chi_0^2 = 12.688 > 11.341 = \chi^2(0.01)$
missing values = 10

表Ⅳ－３ ５教科の評定との関連
－各種別で上位者の含まれる比率－

種別		教免取得せず	小 免	中高社免	養 免	全 体	カイ自乗値
教 科 の 評 定 上 位	国 語	55.0 %	54.8 %	57.4 %	58.2 %	56.1 %	0.356
	社 会	49.3	51.3	60.0	60.0	54.8	5.025
	数 学	52.5	58.3	49.4	67.3	54.6	6.149
	理 科	52.9	53.9	55.2	65.5	55.4	2.722
	英 語	51.4	70.4	57.4	67.3	60.0	11.144

注) カイ自乗値は、各教科の上位・下位×種別、2×4表のもの。
5%水準で、自由度3のカイ自乗値 $\chi^2(0.05) = 7.815$

位者、満たない者を下位者として作成した表が、表Ⅳ－２である。

「評定平均値」上位の者の比率は、「養免」で79.1%、「取得せず」で52.5%と対極をなしている。教員免許希望者と「評定平均値」との間には、有意の差が認められる。

さらに、5教科の評定について、上述の操作を行ない、上位者のみの比率を示したものが表Ⅳ－３である。上位者としたのは、国語で評定3.8以上、社会3.9以上、数学3.6以上、理科3.6以上、英語3.7以上である。国語では、種別によって差が見られないが、英語では明瞭な差が見られる。数学でも差が見られる。総じて言えることは、「養免」で「評定平均値」や各教科の評定の高い者が比率のうえからも多く含まれるし、「取得せず」は、その逆であるということである。

以上をやや強引に敷衍するならば、高校時代の成績の良かった者がより多く教員免許状を希望し、その傾向はとりわけ養護教員免許希望者に強く出ていることである。さらに、この関連性は、「評定平均点」と英語の評定との関連において読むことができる。

4. 入学経路との関連

人間科学部への入学の方法（経路）は、4通りある。それは、a. 附属高校からの推薦による方法、b. 一般の推薦入学、c. 学力試験の合格、d. 学力試験の繰り上げ入学である。aの経路は、当該年度では極めて少数であったので、aとbを推薦入学として一括し、全体を「推薦」「学力」「繰り上げ」の3分類との関連を示したものが、表Ⅳ－４である。

教員免許状取得希望と入学経路とは明らかに有意の差が認められる。特徴的な傾向は、次のことである。1)「中高社免」「養免」では比較的多くの推薦入学者を含む。2)「小免」では比較的多くの繰り上げ入学者を含み、推薦入学者は少ない。3)「取得せず」では比較的多くの学力入学者を含む。

このことから、次のことが推測できる。すなわち、推薦入学者は、かなり意識的に中高社会・養護教員免許状を取ろうとし、繰り上げ合格者は、小免取得を考える多くの層がある。学力入学者は、本来の人間科学部のカリキュラムに沿って勉学しようとする傾向をもつ。

表Ⅳ-4 入学経路との関連

種別		教免取得せず	小 免	中高社免	養 免	合 計
入学経路	推 薦	33.6%(48) 28.6	26.5%(31) 18.5	42.6%(66) 39.3	42.6%(23) 13.7	35.8%(168) 100.0
	学 力	55.2 (79) 32.5	50.4 (59) 24.3	51.0 (79) 32.5	48.1 (26) 10.7	51.8 (243) 100.0
	繰り上げ	11.2 (16) 27.6	23.1 (27) 46.6	6.4 (10) 17.2	9.3 (5) 8.6	12.4 (58) 100.0
合 計		100.0 (143) 30.5	100.0 (117) 24.9	100.0 (155) 33.0	100.0 (54) 11.5	100.0 (469) 100.0

注) $\chi_0^2 = 22.111 > 16.812 = \chi^2(0.01)$
 missng valnes = 7
 下段は横計の比率。以下同じ。

表Ⅳ-5 専修との関連

種別		教免取得せず	小 免	中高社免	養 免	合 計
専修	心 理 学	58.9%(83) 38.2	39.0%(46) 21.2	43.9%(68) 31.3	36.4%(20) 9.2	46.3%(217) 100.0
	社 会 学	19.1 (27) 26.7	17.8 (21) 20.8	23.9 (37) 36.6	29.1 (16) 15.8	21.5 (101) 100.0
	教 育 学	12.8 (18) 17.0	39.8 (47) 44.3	23.2 (36) 34.0	9.1 (5) 4.7	22.6 (106) 100.0
	人 間 学	9.2 (13) 28.9	3.4 (4) 8.9	9.0 (14) 31.1	25.5 (14) 31.1	9.6 (45) 100.0
合 計		100.0 (141) 30.1	100.0 (118) 25.2	100.0 (155) 33.0	100.0 (55) 11.7	100.0 (469) 100.0

$\chi_0^2 = 43.176 > 21.666 = \chi^2(0.001)$
 missing valnes = 7

5. 専修との関連

表Ⅳ-5は、専修との関連を示している。ただし、昭和54、55年度入学生の総合(B)コースの学生は、本来なら人間学へ入れるべきであるが、データ・ベースがそのように作られていないので、心理学、社会学、教育学へ割り振られ実情に合わない例数となっている。しかし、一応の傾向は見られる。それは、以下の点である。1) 心理学専修では、「取得せず」の比率が高い。2) 教育学専修では、「小免」の比率が高い。3) 人間学専修では、「養免」の比率が高い。4) 社会学専修は、おおむね学部全体の状況を反映している。

パターン化して言うならば、心理学専修学生は、教職よりも他の職種への志向を内在させており、教育学専修学生は小学校教員へ、人間学専修学生は養護教員へという強い志向を示している。この傾向は学部の状況を知る者の常識を満足させるものであろう。

6. 履修科目との関連

大学での勉学の関連の一端を見る方法として履修科目数との関連を見る。表Ⅳ-6がそれであるが、一般教育、専門、その他(他学部聴講)の一学生当りの履修登録と実際に履修した科目数の平均を示している。参考として、「(延登録科目数-延履修科目数) / 延登録科目数」を計算し、「放棄率」としている。この数値が高いほど、より多く途中で授業を放棄することを示している。

一見して言えることは、1)「取得せず」で、登録科目数は他と比較して少ないにもかかわらず、実際の履修科目は少ない、つまり放棄科目が多いということである。2) 次いで、「中高社免」での放棄率の高さが目立つ。3)「小免」「養免」では、比較的放棄率は低い。4)「小免」において、その他科目の放棄率は著しく低い。

この状況を現実に照らして言うと、次のよ

表Ⅳ-6 履修科目との関連

種別		教免取得せず	小 免	中高社免	養 免	全 体
一科 般 教 育 目	登 録	14.7	14.3	14.7	13.6	14.5
	履 修	11.8	12.6	12.5	12.8	12.3
	放 棄 率	0.195	0.118	0.150	0.063	0.153
専 門 科 目	登 録	33.7	33.9	40.0	45.2	37.1
	履 修	25.8	30.9	35.1	41.0	32.2
	放 棄 率	0.234	0.088	0.122	0.094	0.132
そ 科 の 他 目	登 録	2.4	11.4	1.3	1.5	3.1
	履 修	1.2	11.2	1.2	1.4	3.0
	放 棄 率	0.524	0.016	0.082	0.067	0.055

登録, 履習は1学生平均の科目数

うになるであろう。全体としてみると教員免許希望者の方が科目履習の状況は良いし、それに反して、教員免許を取らないとしている層は、専門科目の4分の1を放棄しているように、履習状況は悪い。とりわけ目立つことは、養護教員免許希望者と小学校教員免許希望者の履習状況の良いことである。

7. ま と め

教員免許希望者とそうでない者と比較しつつ、諸要因との関連を見てきた。限定づきの小論であることは、2で述べた通りであり、今後の問題と言わねばならない。しかし、諸要因との関連性で言うならば、次の暫定的な知見を言うことができる。人間科学部の学生にあっては、1) 高校での成績と免許希望との間に関連性が認められる。小免希望、養免希望者の中に比較的高校時の成績の良い者が多く含まれている。2) 入学経路と教免希望との間にも関連性が認められる。教免取得をしない者は学力入学者に多い。3) 専修との関連では、教育学で小免、人間学で養免という志向を示し、心理学では教育免許取得への志向は低い。4) 履修科目との関連では、総じて、小免、養免希望者が健全な履習状況を示している。(勅使河原勝男)

V 大学での成績と高校での課外活動

本節では、主として大学での成績と高校での課外活動について分析する。

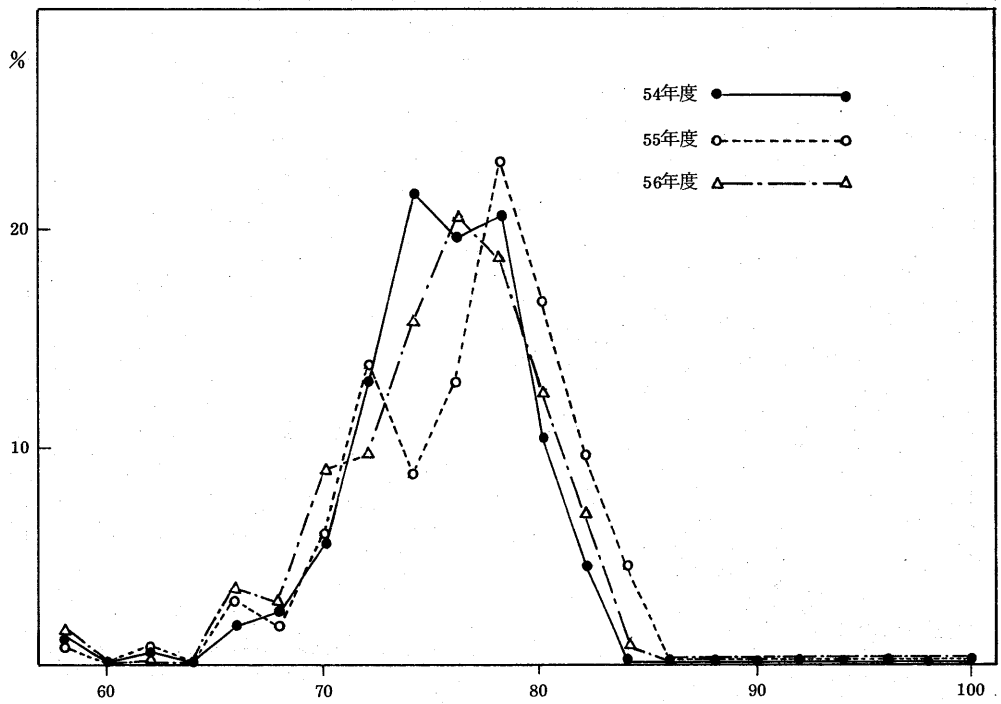
基 礎 集 計

1. 大学での成績

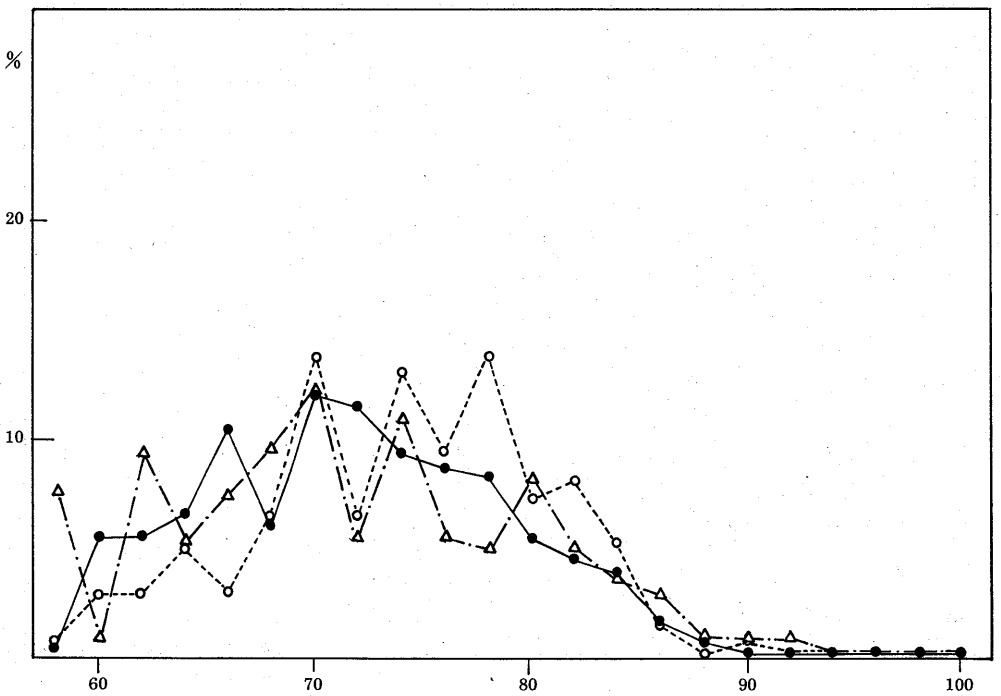
大学での成績は、一般教育(以下般教と略す)、語学、専門の3領域の成績をとりあげた。各領域ごと及び3年間全体の成績ヒストグラムが図V-1a, b, c, dである。平均と標準偏差は表V-1のとおりである。

表V-1 領域ごとの平均値と標準偏差

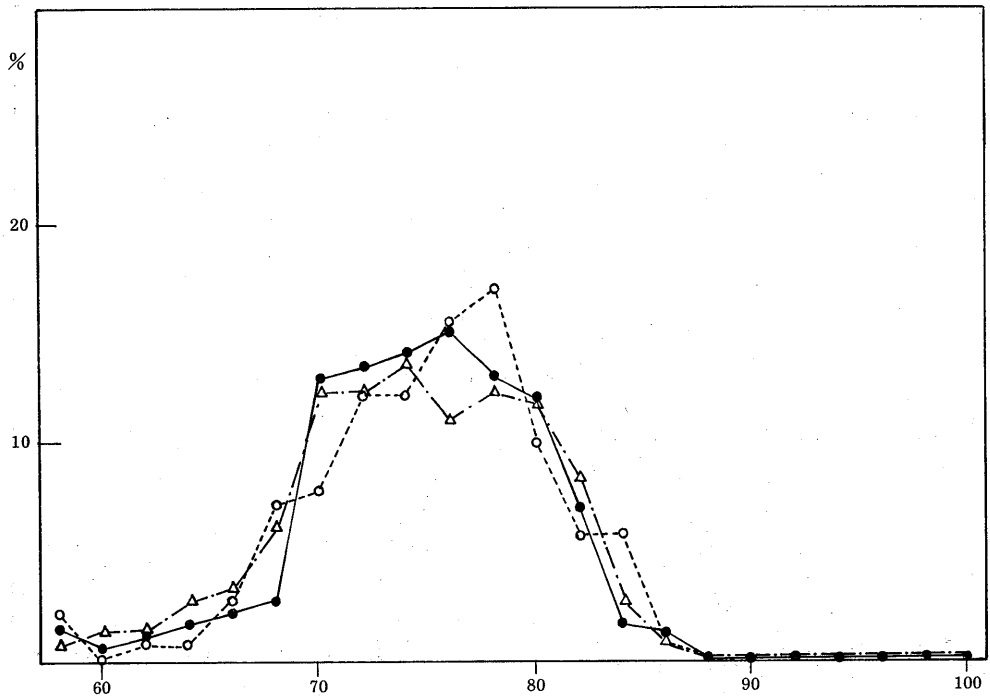
領 域	年度(昭和)	平 均	標準偏差
一 般 教 育	54	76.18	4.03
	55	77.09	5.65
	56	76.23	4.70
	全	76.46	4.76
語 学	54	72.56	7.08
	55	74.85	6.56
	56	72.14	8.21
	全	73.10	7.39
専 門	54	75.48	6.21
	55	75.51	7.66
	56	75.26	5.70
	全	75.42	6.52



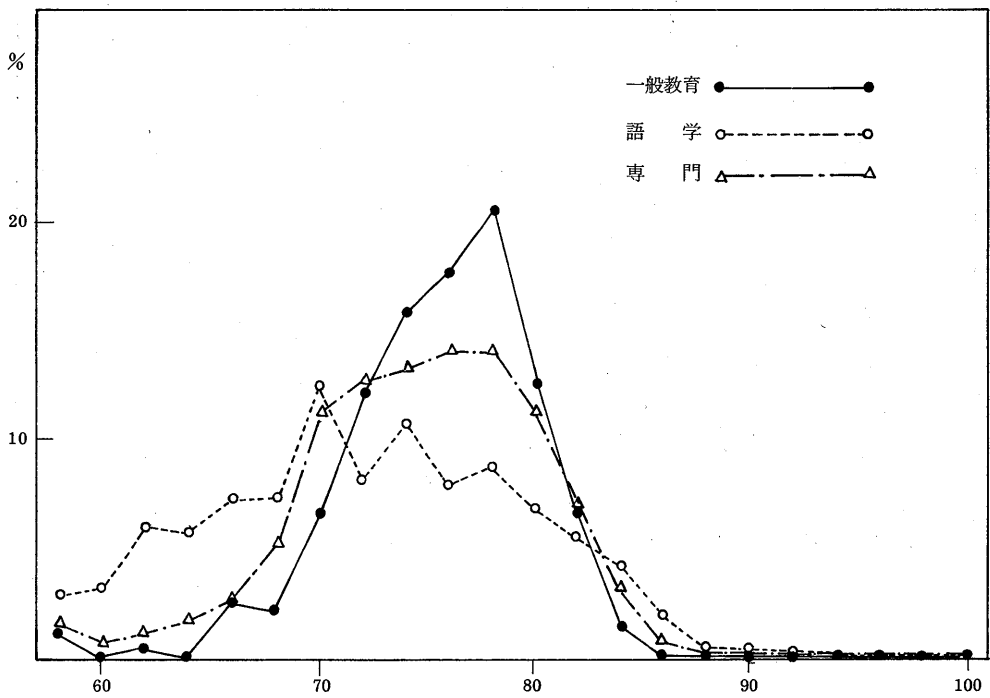
図V-1a 一般教育の成績分布



図V-1b 語学の成績分布



図V-1c 専門の成績分布



図V-1d 3年間全体の成績分布

これをみると、分布は各領域に固有の特徴を示しており、それは3年間を通じてほぼ同様である。したがって3年間全体の分布にもその特徴は現われているわけで、ここでは3年間全体の分布を中心にして、各領域の特徴をみることにする。

一般教育：般教はほぼ正規分布に近い形を示しているが、分散の小さいことが特徴である。過半数(54.4%)が74~78点に集中しており、範囲を72~80点に広げると80%近くの者がここに含まれる。ちなみに、前者の範囲を専門でみると41.2%で13%の違いがあり、語学にいたっては、27.6%と半数にしかない。このように、般教は尖った正規性の分布を示すのが特徴的で、それはヒストグラムの形状からも明らかである。

語学：語学の分布は、3年間全体をまとめてみれば正規分布に近づいているとはいっても、各年度で示されている波状の形状は依然残されている。また70点以下の下位が多く、72~80点の中位が少ないことも指摘できよう。70点以下の下位に語学では44.9%もいるのに、般教、専門では各々12.7%、23.9%を占めるに過ぎない。中位については般教のところでも述べたとおりである。また、このことと関連するが、般教、専門では78点付近まで比率が上昇を続けるのに対し、語学では70点付近で上昇がとまり、それ以後多少の増減はあるものの緩やかに減少傾向を示しているのが、特徴的である。ところが、82点付近から僅かではあるが、他の領域より比率が増え90点を越える者もでてくるのは興味深い。

このような結果からみて、語学はかなり好成绩をとる者もいるが、他の2領域と比べると全体にその成績は芳しくないといえようである。

専門：専門の分布は緩やかな曲線をもった正規性の分布である。この分布の中心を成すのは70~80点の中位で、全体の76.3%を占めている。比率ではこの範囲の般教85.8%に及ばないが、特徴的なのは分布のパターンであって、この範囲の専門の分布はいずれも11.1%から14.0%の間にあり、各階級ともほぼ同

じ比率で並んでいる点である。中位がこのような状況であるのに対し、上位では、82点を境として般教よりも比率が増えており、下位でも、72点を境として比率が増えている。特に下位でこの傾向が著しい。上位、下位のこうした現象は、境界点に多少の相違はあるものの、年度によらず共通している。

専門の分布を般教との比較でいうならば、般教が尖った正規分布をしているのに対し、専門は上位、下位へより広い裾野をもった頂上が扁平な分布といえよう。もっとも、56年度の分布については、頂上付近の形状についてはあてはまらず、むしろ般教型に近い。それでも、裾の広がり方はやは般教よりも広く、結果的に頂上付近では、般教の尖り方には及ばない。

共通点：以上述べたように、3領域は各々独自の分布を示しており、互いに異った様相を呈しているが、最後に共通する点を指摘しておきたい。それは上位の分布である。前述したように、語学はかなり高評価まで分布が広がっていることや、専門の比率が般教を上まわっているということはあるものの、中位、下位の大きな相違に比べるとその差は小さく、互いに接近しているといえよう。またヒストグラムの形状をみても同様で、中位、下位に比べてほとんど同一といっている形状を成している。上位、特に83点以上では、3領域とも同じような分布をしているといっていよう。

論議：以上指摘した分布の特徴について、考えられる点をいくつか述べておく。

成績、すなわち評価ということであるが、最も基本的でありながら、最も難しいのが評価の根拠という問題である。仮にある答案に75点という評価を与えたとき、何故それが74点でも76点でもなく、75点なのか。0点から100点の間のある1点に位置づけることが可能なのか。そもそも学業の成果を得点化することが可能なのか。このような問題に対して少なくとも共通の答が存在しているとは思われない。学業の成果そのものを得点化するこ

とにまつわるこうした問題をひとまずおくとしても、あるいは仮にその問題がないとしても、評価にあたって学業の成果だけがその根拠であるとは限らず、そこには様々な要因が影響するという実情を無視できない。思いつくままに挙げてみても、出席回数、受験態度、レポート提出数、その有無といった学生側の要因、受講者全員の得点分布に対する按配、就職や免許、卒業への影響に対する配慮といった教員側（採点者側）の要因などが、実際の評価に深く関わっていることは否めない。今回示された領域ごとの成績分布の相違は、それら要因の影響が各々異って作用することに由来するのかもしれない。

たとえば一般教では、自覚しているにせよいにせよ、75点近傍に平均をもつ正規分布型の評価が行なわれている可能性は大きい。そこには、余程のことがない限り、不合格点をつけにくいという心情も働いているのではないだろうか。その結果、60点から100点の間で評価点が与えられることになり、分散の小さい分布になると思われる。極論すれば、60点から100点の間で評価するという前提があるわけで、その意味では、評価は絶対評価というより相対評価に近いといえよう。

語学では、その評価は絶対評価に近くなるのが考えられよう。率直に考えて、たとえばある文章が訳せるか否かの結果は歴然としているからである。出席回数が評価に影響する可能性は大きい、それでも50点が80点になるようなケースはあまり考えられず、せいぜい不合格者が合格ラインに達する程度であろう。また、試験で高成績の者が、出席回数が多くないという理由で大きく減点される可能性も少ない。いずれにせよ、語学は試験の成績がそのまま評価に直接現われやすいと考えられる。もしそうであるならば、前述した語学の成績分布は、本学部の学生の語学力が芳しくないことを否応なく反映した結果ということになる。ただし、個人差は大きく、それは分布や標準偏差の示すとおりである。

語学成績が波状を呈することについては、

その理由が判然としない。あえていうならば、ここで用いた個人成績は語学6科目（あるいはそれ以下）の平均点であり、一般教や専門の $1/2 \sim 1/6$ の科目数しかないため、採点上担当教員の個人差が反映されたためかもしれない。

専門についていうならば、一般教で述べたことがほぼそのままあてはまるだろう。ただ、一般教に比べると評価は厳しくなり、一般教の中位にあたる部分（「良」相等）が減ってその分下位（「可」以下相等）が増えていると考えられる。

評価には様々な要因が影響すると思われるが、以上述べた中で触れたように、それらの多くは評価を下げる方向よりもむしろ上げる方向に働くことが多いと考えられる。すなわち、評価の低い者を「救済」するように働いているのが実情ではないかと思われる。そうであるとすれば、評価に影響する要因は、下位ほど大きく働くことになる。

領域によっても年度によっても、分布に乱れや顕著な差異が生じるのは、いずれも中位から下位であるのは、そこでは様々な要因が複雑に影響しているせいであろう。成績が上位の者は本来的に多くないうえに、そうした要因の影響も少なくなるために、領域、年度に関係なく、ほぼ同一の分布を示すのであらうと思われる。

2. 高校での課外活動

54年度生から56年度生までの高校での課外活動状況を表V-2、V-3に示した。この場合、生徒会とは狭義の生徒会に限らず、文化祭実行委員会など何らかの全学的組織も含まれている。クラスも同様で、クラスの組織であればすべてクラスに含むこととした。

表V-2は、たとえば、クラス委員を務め体育系クラブにも所属しているというような場合、双方にカウントする重複表である。それに対して表V-3は、生徒会、クラス、クラブを通じて最も責任ある役割をカウントした表である。表V-3から、各組織の長、副を

表V-2 高校の課外活動(1)

課外活動	年度(昭和)	長	副	役員	部員
生徒会	54	4	3	19	—
	55	5	2	24	—
	56	4	2	19	—
	全	13	7	62	—
クラス	54	12	13	103	—
	55	7	12	83	—
	56	8	7	69	—
	全	27	32	255	—
体育系クラブ	54	3	1	3	76
	55	5	2	0	60
	56	9	4	17	50
	全	17	7	20	186
文化系クラブ	54	4	2	1	63
	55	2	1	1	47
	56	7	0	8	59
	全	13	3	10	169
芸術系クラブ	54	3	0	1	33
	55	2	2	2	37
	56	2	0	1	37
	全	7	2	4	107
技術系クラブ	54	1	0	0	2
	55	0	0	0	7
	56	1	1	0	24
	全	2	1	0	33

含む役員経験者の数を求めたのが表V-4である。この表からわかるように、何らかの形で責任ある役割を果たしている者が75%から80%いることがわかる。

表V-3によると、課外活動に全く関与していない者はわずか7.1%にすぎない。それだけ高校の課外活動が活発だといえるが、クラブ活動を義務づけられている高校があることも考慮する必要がある。

大学での成績と高校での課外活動

方法：高校の課外活動について、以下の5つを規準として各々2群に分け、大学での成績を般教、語学、専門の3領域で比較した。

- (1) 課外活動経験の有無
- (2) クラブ役員経験の有無
- (3) クラス役員経験の有無
- (4) 生徒会役員経験の有無
- (5) クラブ、クラス、生徒会いずれかの役員経験の有無

この場合も、生徒会、クラスは前述したような広義の組織として考えている。

結果：各規準、領域ごとにも、t-検定を行なった結果が表V-5である。この中で際だっているのはクラス役員経験を規準にした比較である。ここでは最も明瞭に大学の成績に差が現われている。クラス役員経験者の方が3

表V-3 高校の課外活動(2)

年度(昭和)	長	副	役員	部員	無	計
54	26(14.1)	17(9.2)	96(51.9)	26(14.1)	20(10.8)	185(100.0)
55	22(15.5)	14(9.9)	76(53.5)	24(16.9)	6(4.2)	142(100.0)
56	31(20.8)	12(8.1)	78(52.3)	20(13.4)	8(5.4)	149(100.0)
全	79(16.6)	43(9.0)	250(52.5)	70(14.7)	34(7.1)	476(100.0)

表V-4 高校の課外活動(3)

年度(昭和)	役員(長・副を含む)	部員	無	計
54	139(75.1)	26(14.1)	20(10.8)	185(100.0)
55	112(78.9)	24(16.9)	6(4.2)	142(100.0)
56	121(81.2)	20(13.4)	8(5.4)	149(100.0)
全	372(78.2)	70(14.7)	34(7.1)	476(100.0)

表 V - 5 経験者 - 非経験者の成績比較

		一般教育		語学		専門	
		経験	非経験	経験	非経験	経験	非経験
課外活動	N	437	34	435	33	439	34
	\bar{X}	76.56	75.15	73.29	70.67	75.66	72.28
	SD	4.72	5.06	7.47	5.73	6.48	6.18
	t(df)	1.665(469)		1.967(466) [*]		2.933(471) ^{**}	
役員経験	N	367	104	365	103	368	105
	\bar{X}	76.65	75.80	73.42	71.97	75.89	73.75
	SD	4.65	5.10	7.52	6.80	6.15	7.46
	t(df)	1.606(469)		1.760(466)		2.986(471) ^{**}	
クラブ役員	N	77	394	77	391	78	395
	\bar{X}	76.60	76.44	71.24	73.47	75.19	75.46
	SD	4.41	4.83	8.43	7.12	5.52	6.70
	t(df)	0.269(469)		-2.428(466) [*]		-0.344(471)	
クラス役員	N	310	161	309	159	311	162
	\bar{X}	76.92	75.59	73.88	71.59	76.20	73.92
	SD	4.04	5.84	7.22	7.50	5.90	7.37
	t(df)	2.887(469) ^{**}		3.200(466) ^{**}		3.645(471) ^{**}	
生徒会役員	N	82	389	81	387	82	391
	\bar{X}	75.24	76.72	72.81	73.17	74.88	75.53
	SD	6.00	4.42	6.54	7.56	7.58	6.27
	t(df)	-2.568(469) [*]		-0.398(466)		-0.820(471)	

*.....p<.05 **.....p<.01 ***.....p<.001

領域すべてにわたって有意に得点が高い。他の規準をみると、課外活動経験では2領域（語学，専門）で、役員経験では1領域（専門）で、それぞれ経験者の成績が有意に高くなっている。これに対してクラブ役員は語学で、生徒会役員は般教で、各々経験者の方がむしろ有意に低くなっている。

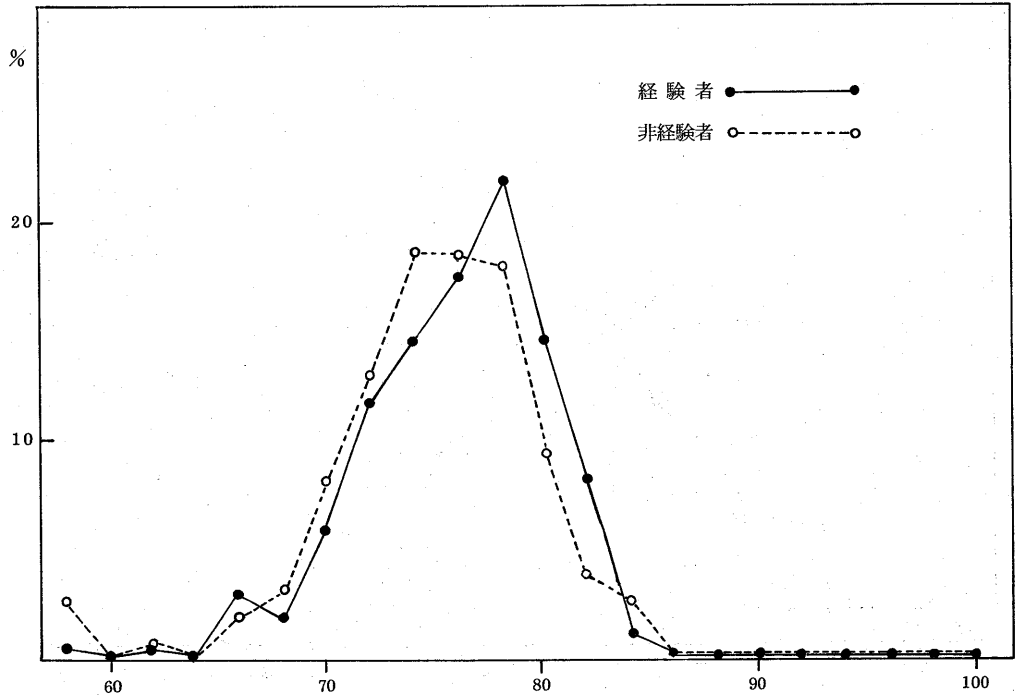
以上の結果を総合すると、クラス役員経験の有無が大学の成績と最も深い関係にありそうだと考えられる。というのも、クラス役員経験を基準にした比較で最も明瞭に差が現われたというだけでなく、クラス役員経験を部分集合、それも大きな割合の部分集合として含んでいる課外活動経験者、役員経験者のグループに限って、有意な好成績を示しているからである。しかも、この2群は、クラ

ス役員以外の者を含めた分だけ、成績の平均はむしろ下がる傾向にある。結局、この2群の成績を支えているのは、この群の多くを形成しているクラス役員経験者の一群であると考えられることになる。

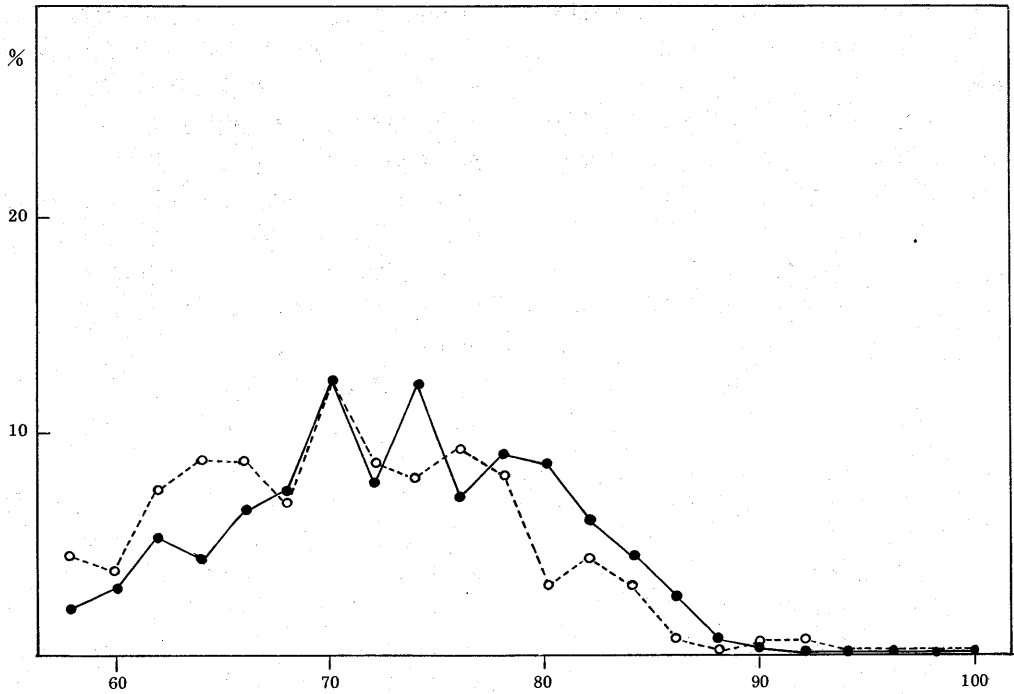
そこで、クラス役員経験の有無についても少し詳しくみてみよう。

クラス役員経験者、非経験者について3領域の分布を示したのが図V-2 a, b, cである。

この分布をみれば、クラス役員経験の有無による相違は明らかであるが、特に60点未満（不合格）の範囲で両者の差は顕著にあらわれており、経験者に比べて非経験者の率は般教、語学、専門すべての領域で著しく高い。つまり、クラス役員経験の有無による差は、



図V-2 a クラス役員経験者と非経験者の成績分布：一般教育



図V-2 b クラス役員経験者と非経験者の成績分布：語学

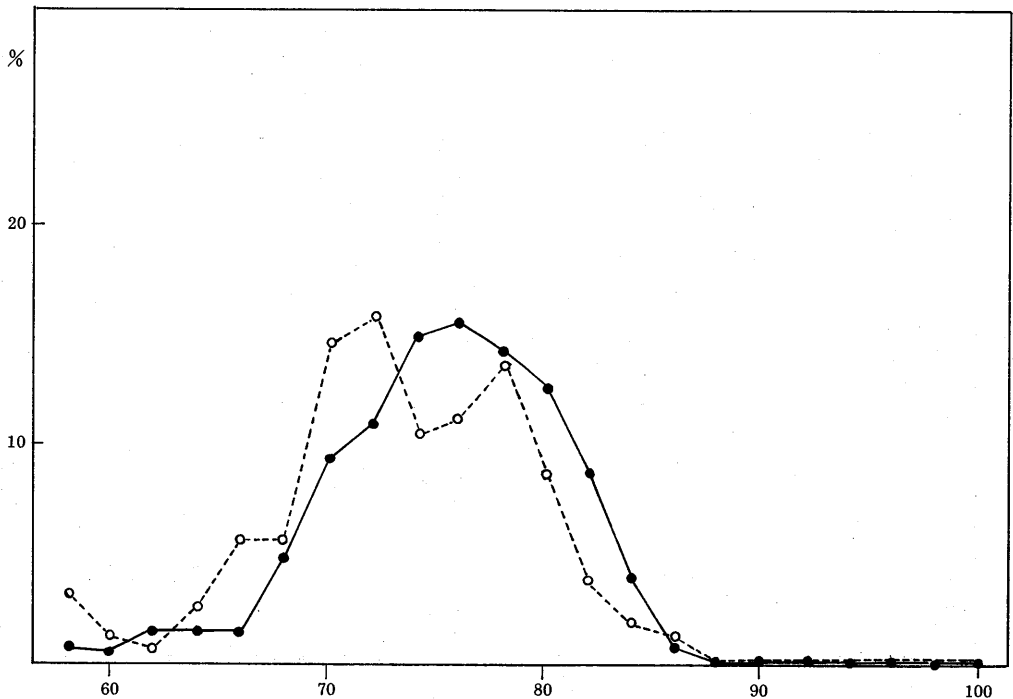


図 V-2c クラス役員経験者と非経験者の成績分布：専門

単にその分布のズレだけでなく、不合格範囲の分布の相違にも現れているといえよう。

論議：以上の結果は、いずれもリーダー的役割でありながら、生徒会役員とクラブ役員は大学の成績にあまり関係せず、クラス役員は経験だけが大学の好成績と関係しているというものであった。

このことについて、集団の大きさの違い、選出規準の違いという2つの観点から論議したいと思う。なお、以下の論議は、役員決定が選挙によってなされるという前提に立つものである。

クラス役員と生徒会役員を選出する際の規準は、それほど異なるとは思えない。それが何であるかを具体的に示すだけの根拠をもちあわさないので推測の域を出ないが、成績、人望、役割遂行能力といったところであろう。クラス役員選挙の場合には、クラスという集団を構成する人数が少ないために、それらを含めた様々な面で互いに良く知っているとい

う事情がある。したがって実際の選挙にあたって、ほぼその規準に妥当な者が選ばれる可能性は高い。一方、生徒会役員の場合はやや事情が異なる。全学規模の組織であるために、選挙者が被選挙者をそれほど良く知っているとは思えない。仮に候補者の中に前述の規準にあてはまらない者が含まれていたにせよ、それを識別しにくいという可能性がある。いいかえれば、候補者に対する評価の妥当性が、相対的に低いといえる。

以上のような集団の大きさによる評価の妥当性の違いが、大学の成績の違いとなって現われたのではあるまいか。

クラブ役員を選出にあたっては、生徒会やクラス役員とはまた違った側面がある。クラブという集団は、生徒会やクラスよりもその集団の目的が明瞭である。したがってそこで役員に選ばれる者は、クラブ集団の目的をより達成した者、いいかえれば、そのクラブで要求される技術や知識をより身につけた者と

なりやすい。少くともそれは必要な条件となる。この点が生徒会やクラス役員とは異なる選出規準である。クラブの目的は、大学教育の（この場合人間科学部の）要求するものとはまったく無関係といってよいのだから、クラブ役員の経験が大学の成績とは関係がないということになるのであろう。

(大熊保彦)

お わ り に

本研究によって、付表に示したように、大

学・高校の成績および学園生活、入試の成績さらに就職などの調査項目が決定され、数量的研究の基礎づくりが一応整った。したがって、今後上記データを用いての研究が多く行われることが期待される。なお、上記データの利用に関しては、本学部長に相談された。

最後に、本研究のデータ作製に惜しみない協力をしてくれた助手の方々、電算室の方々に深謝いたします。

尚、本研究は昭和58年度の学部の共同研究費の助成による。

(1983年9月25日受付)

付表

調 査 項 目

【基礎項目】

学籍番号 (留年, 転入学)
性別
生年月日
専修 (コース)

【入試項目】

入試年度
※受験形態 (推薦, 付属推薦, 学力, 繰上)
※内申点
高校調整点
※小論文 (推薦のみ)
※国語成績 (学力のみ)
※英語成績 (学力のみ)
選択科目成績 (学力のみ)
選択科目の種類 (学力のみ)

【高校項目】

高校 (コード)
設置種別 (全日制, 定時制, 検定)
専攻科 (普通(理数を含む), 商業, 工業, 農林畜水, 体美音, その他)
ランク
卒業年度
※評定平均値 (国語, 社会, 数学, 理科, 体育, 芸術, 英語, 家庭, その他)
履習単位数 (同上)
各学年ごとの評価 3~5 各々の数 (国語, 社会, 数学, 理科, 英語)
2 の数
成績ランク

課外活動歴

※生徒会あるいはそれに準ずる全学組織 (長, 副, その他の幹事)
※クラスあるいはそれに準ずるクラス組織 (同上)
※体育系クラブ (長, 副, その他の幹事, 普通部員)
※文化系クラブ (同上)
※芸術系クラブ (同上)
※技術系クラブ (同上)
校外活動 (奉仕, 地域活動, 研究会, サークル, その他)
特記事項 (留学など)

【大学項目】

※課目ごとの成績 (0~100点)
学籍履歴 (退学, 休学, 卒業など)
*資格
*課外活動
学友会
体育系クラブ
文化系クラブ
技術系クラブ
同好会
校外活動
*就職
業種 (第1~第3希望と決定)
職種 (同上)
常勤・非常勤の別